

東京の言語景観と留学生から見た多言語対応状況

～2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて～

西郡 仁朗 黒田 史彦
福田寺 紫陽 市川 紘子

1. はじめに

2020年東京オリンピック・パラリンピックを控え、東京では外国人（観光客・定住者）への「おもてなし」や住みやすさを求めるさまざまな活動が行われている。首都大学東京人文科学研究科日本語教育学教室と国際センターでも、留学生への日本語・日本事情教育の一環としていくつかの教育活動等を行い、東京都が進める多言語対応事業への協力を行っている。

本報告は、2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けた多言語共生社会の進展に資するため、留学生から見た多言語対応の状況についての調査や教育の成果を記録することを主目的とする。

前半は、研究者としての立場から、主に西郡が東京の言語景観を概観してビデオ教材を作成した経緯を述べ、教育利用法について触れている。その際、本稿執筆者は対象をあくまで客観的に眺め分析するという研究者としての立場をとっている。しかしながら、後半の部分については、東京都に事務局を置く多言語対応協議会からの呼びかけに、東京都の各区市町などが対応し、首都大学東京の留学生と教員（西郡、黒田、福田寺、市川）が参加・協力する形で行われ、行政的な目的に合わせた行為を行っている。つまり、執筆者らは自分たちの行為が、対象・現象を、望む方向に変化させたいという目的活動を協議会と共に行うアクティビストとしての立場をとっている。

こうした自分たちの視点の違いには、冷静な自己観察をしておく必要があると考える。

本稿の大部分は、2015年7月22日に東京国際フォーラムにおいて行われた「2020年オリンピック・パラリンピック大会に向けた多言語対応協議会 多言語対応・ICT化推進フォーラム～人と技術によるおもてなし～」, および、2015年11月18日首都大

学東京 国際センターシンポジウム「東京から世界へ -2020年オリンピック・パラリンピックまでに何をすべきか -」において口頭発表されたものをもとにしている。

2. 『東京の言語景観- 現在・未来 -』の制作とそれをもとにした教育活動

人間が世界中のどこで生活していても、通常、数多くの看板や掲示物、ポスターやチラシ、ステッカーなどを目にする。特に都市での生活では、これらに取り囲まれていると言ってもよいだろう。これらに書かれている文字言語を「言語景観 (Linguistic Landscapes)」と呼ぶ。ロング(2010)は言語景観に関して詳細な定義を行っているが、本稿ではそれを踏まえ「言語景観は公共空間にあり、不特定多数に向けられ、自然に、或いは受動的に視野に入る書き言葉を指す」と定義する。

言語景観には、その地域の文化・社会・経済の状況や思想などが現れ、また、優勢言語や劣勢言語、多言語あるいは複言語の状況を観察することができる。言語景観は、社会言語学や経済言語学の研究対象として近年注目を浴びており、世界のさまざまな都市の言語景観に焦点を当てた研究も数多い(井上, 2000; 中井・ロング, 2011 など)。また、言語教育でも教室授業だけでなく学習者が生活空間での言語景観を自ら調査することで、ことばと社会・文化を同時に学ぶことができ、主体的な活動にもつながるものとして注目されている。

首都大学東京人文科学研究科日本語教育学教室では、言語景観をテーマとしたビデオ教材『東京の言語景観 - 現在・未来 -』を制作した(西郡・磯野, 2014)。これは、上記のように、社会言語学での議論や、留学生への日本語・日本事情教育での利用を企図して作成されたものである(磯野・西郡, 2014)

東京の言語景観についてはバックハウス(2010)など、地点を限定し精密な調査に基づく研究もある。今回作成されたビデオ教材は、先行研究をもとに、広域的な概要調査を行い、教育利用のために比較的短いビデオクリップ(13分程度)としてまとめたものである。ナレーションの音声は日本語のみであるが、英語・中国(簡体字)・韓国朝鮮語・インドネシア語・ベトナム語・モンゴル語の字幕をつけたものも用意され、インターネット上で無償公開している¹。対面教育での使用や、遠隔教育などを通じた

¹ http://nihongo.hum.tmu.ac.jp/mic-j/linguistic_landscapes/を参照されたい。

海外での使用や、合同セミナーを通じた利用も行われている。また、2015年度中に、フランス語版と中国（繁体字）版も公開できる予定である。

以下に教材概要を記す。

2-1. 言語景観について

「言語景観」という概念について上で説明した内容を動画としてまとめたものである。

2-2. 公共表示

東京の空港や駅構内の公共性の高い、乗り換え、出口、トイレなどの指示の表示や切符売り場については、大部分が日本語、英語・中国語、韓国語の4か国語の多言語表記になっている（図-1、2参照）。

国際語としての英語、また国と国の距離が地理的に近く互いに影響し合う「地理的近接効果」によって中国語と韓国朝鮮語の表記も標準的なものになってきていることが確認できる。また、ピクトグラムが多用されていることも共通している。

駅など公共性の高い場所での表示については、東京都心であっても東京郊外であっても同様の傾向にある（図-3参照）。

バスでも、多言語で表記されており、タクシーの大部分でも少なくとも日本語に加えて英語の表記はある。

東京の公共施設では4言語とピクトグラムによる表記が標準的なものになってきている。これには外国人旅行者・定住者の増加という背景もあるが、1990年代から東京都が進めてきた多言語表記への呼びかけが奏功している面もあると思われる。



図-1 公共表示（空港での例）



図-2 公共表示（駅での例）



図-3 都心部と郊外の
公共表示の比較

2-3. 民間表示

一方民間での表示は多種多様であり、必ずしも多言語化しているわけではない。無論、外国人観光客や外国人顧客の多い店では、客に合わせた言語で表示しており、例えば、図-4、5 に記した店では、それぞれ、中国語、タイ語が優先的に表示されている。必ずしも英語が優勢ではない。

民間表示では、日本人顧客の目をひくことが優先され、ターゲットとなる人々の世代などの属性、地域や店舗のセールスポイントを広告として示すことが主目的となる。



図-5 タイ語による表示
(浅草の洋品店)

図-4 中国語による
フロアガイド (秋葉原
の電気店)



ここで、若者の街 渋谷と、古くからの観光地 浅草での言語景観の特徴を分類・整理する。

ただ、この分類と整理は、看板などの表示を悉皆的あるいは詳細に調査を行った上でのものではなく、ビデオ制作に当たった者の観察と議論によって行われた（参照：磯野・西郡，2015）。

2-3-1. 渋谷での民間表示の特徴

周知の通り、渋谷は若者の多い街で、日本の新しい流行の発信源の一つである。ここでは、やはり、若者をターゲットとしたさまざまな工夫のある言語景観上の特徴が見られ、下記の3点にまとめられた。

- ① カジュアルな話し言葉：看板に「めっちゃ」や「今、白がきてます」などカジュアルな表現を使うことで親しみやすさを表している。あるラーメン店に見られた「白めしただっす」という



図-6 渋谷のあるラーメン店の看板

看板は、「白いごはんを無料で提供しています」という意味で、話し言葉として相当にくずされたものが使用されている（図-6 参照）。

- ② 縮約形：「コーディネート割引」を「コーデ割」、「へそ用のピアス（販売の装着する店）」を「へそピ」などと、ことばを短くするとともに親しみを抱かせる演出をしている。縮約形の中には「プリクラ」や「スマホ」など一般のことばとして定着しているものもある。
- ③ カタカナ表記：本来、漢字やひらがなで表記するものをカタカナで表記し、あえてカタカナで表現することで、くだけた印象や商品への親しみやすさを演出しているものが数多く見られた。例えば、「イチオン（一押し）」「クセになる味」「ナツイチ（この夏一番：意味の縮約も伴う）」などが見られた。

渋谷の言語景観においては、文字表記だけでなく、色やフォント、デザインを工夫することで若者などに対して伝えたい効果を変えようとしている意図が見られる。

2-3-2. 浅草での民間表示の特徴

浅草は、日本の伝統的街並みが残り、外国人観光客にも人気がある。江戸時代から

の歴史を感じさせる言語景観が数多く見られ、その特徴は大まかに言って以下の二点にまとめられる。

- ① 伝統の直接の強調：「江戸土産」「創業明治～年」など伝統を強調した看板などが数多く見られ、商品にも「べらぼうめ」など現在はほとんど使わなくなった話しことばなどが使われている。
- ② 雰囲気の効果：現在ほとんど使われない「ジャンパー」などのことばや、カタカナ表記をあえて漢字表記にした「刷子（ブラシ）」、また、伝統的あるいは独特の文字種、歴史を感じさせるピクトグラムや「変体仮名」などが使用され、独特の雰囲気を出そうとする工夫が数多く見られる（図-7、図-8参照）。



図-7 浅草の看板に見られた文字種とピクトグラム

図-8 浅草の看板に見られた変体がなと江戸時代をイメージさせる絵



2-4. 「2020年東京オリンピック・パラリンピック多言語対応協議会」

本教材の制作時(2014年春から夏)、その後の東京での言語景観といえ、2020年東京オリンピック・パラリンピックとのかかわりが今後の方向性や展開を考える意味で非常に重要であった。そこで東京都オリンピック・パラリンピック準備局と連絡をとり、東京都に事務局がある「2020年東京オリンピック・パラリンピック多言語対応協議会(以下「多言語対応協議会」)」での取り組みと対応を紹介した。

同協議会は2014年3月に、国、地方公共団体、民間の組織等56の機関の協力で設置されたもので、外国人旅行者などが円滑に移動し快適に過ごせるよう、交通機関、道路、飲食・宿泊施設での表示・標識についての多言語対応を検討・整理し、具体的な施策として実施している。多言語表示として、日本語・英語・ピクトグラムが基本となるが、外国人旅行者のニーズ・見やすさ・統一性などに配慮しながらその他の言語を含めた多言語化を、各主体が実施していくことになっている。同協議会では、2020年を見据え、またその後の都市力の向上を目指している。ICT技術も含め、どの国から旅行者が来ても、快適に過ごすことができる言語環境、「言葉のバリアフリー」を目標としている。

3. 留学生から見た多言語対応の状況

これまで述べてきたようにビデオ教材『東京の言語景観 -現在・未来-』は、留学生に対する通常授業（基礎日本語II）や遠隔教育（インドネシア教育大学・台湾慈濟大学など）での大学院交流授業などで用いられ、言語景観についてさまざまな議論や事例が蓄積されてきた（磯野、2015など）。また、同教材の開発に当たっては、先述の通り「多言語対応協議会」の協力を得ており、それをきっかけとして、首都大学東京の留学生から見た多言語対応の状況を、学生独自の調査、同協議会との協働で、留学生が（日本人学生とともに）東京各地に赴いて調査、地元の方との交流、調査成果の発表を行うこととなった。

本学国際センターによる多言語対応協議会へ協力（留学生が参加して看板や外国語メニューの調査、区市町村の方との交流は継続的に行われているが、本稿では、2015年前期前期に行われた活動で、2015年7月22日に東京国際フォーラムにおいて行われた「2020年オリンピック・パラリンピック大会に向けた多言語対応協議会 多言語対応・ICT化推進フォーラム～人と技術によるおもてなし～」の中の「留学生から見た多言語対応」での発表を中心に、その内容を報告する（図-9参照）。



図-9 「留学生から見た多言語対応」

(他言語対応協議会主催，2015年7月22日，於：東京国際フォーラム)

3-1. キャンパス周辺や通学経路の言語景観 ～英語表記の誤りに注目して～

交通機関の標識は、外国人にも分かりやすい工夫が数多く見られる。例えば、ある留学生の報告ではJR横浜線のホームにある路線図は、全線を示し。自分が横浜線のどの駅にいるのか、また、上りと下りのどちらのホームにいるのか、一目で分かりアルファベットも書かれているのでとてもわかりやすいものになっている。

ただ、民間の表示にはちょっとした英語の間違いや、意味が想像できないものもあった。駅の近くのある場所の看板（交通に関する事業者が作ったものではない）では、小田急線や京王線なら1本しか無いので、その方向を表す時、「→ ODAKYU Line」「→ KEIO Line」でいいのだが、JR線は複数の線があるのに「→ JR Line」となっていた。これは1本の線しかないのかと直感的に思ってしまい戸惑う原因になった。

また、大学近くで「What a cool we are！」という妙な看板表示があった。「わたしたち、いける！」を翻訳したのだろうが、文法としては「How cool we are！」が正しい。さらに「歩行者専用通路」に併記されていた英語の訳が、「mole」となっていた。「mole」は動物の「モグラ」であり、留学生は、なぜこの表示なのか全くわからなかったが、知人の日本人の推測では、「mole」は「mall」（ショッピング・モール、

散歩道)を間違えて記したものである。この2語は、日本語としては音韻的に似ているが(それが誤記の理由であろう)、英語としては音韻も意味も全く異なり、連想もできない。さらに“mall”と「歩行者専用通路」との意味・機能の差異も大きい。

一般の日本人の英語の知識(語彙・文法・語用など)から生じる間違いや、インターネットでの自動翻訳による間違いなど、現在の東京の言語景観には数多い英語の間違いがあり、本校に限らず、他の報告でもよく指摘されている(バックハウス, 2011など)。これらについては別稿に譲りたい。

ただ、こうした表示の間違いは、日本に限らず、世界各地での外国語語表記にも散見される。その一つとして、インドネシアの某国際空港到着客が向かう“Baggage Claim”の看板の例を取り挙げる。無論、「手荷物受取所」のことであるが、図-10に実際の写真を示すが「品物損害クレーム」となっている(磯野ら, 2013)。

「クレーム」ということばからのつながりからか、「損害」という言葉が加わったことは推測できるが、“Claim”から「クレーム」への変化が単純な間違いなのか、なんらかの現地の音韻の影響を受けているのかは不明であり音韻論的な根拠は見つからない。



図-10 インドネシアのある空港

「手荷物」の表示

図-10において、中国語訳と

なっている「行李領取」についても、問題があり、語彙2つの選択は適当だが、語順(文法)が逆で、通常は「領取行李」とすべきである。

外国語による表示には、どの国・地域に於いても音韻・語彙・文法・語用さまざまな面で誤りがあるが、こうした表示は、留学生を含む当該言語に詳しい者の助力を得て改善可能である。さらに、誤りの原因を探ること自体が母語や外国語を理解する上で教育研究の対象となり、特に教育活動などでは発展的に利用できるものであることを指摘しておく。

3-2. 戸越銀座商店街 ～看板メニュー調査～

2015年6月21日、東京都品川区 戸越銀座商店街に留学生と日本人学生が赴き、地元のボランティアの学生とともに標識・表示・看板・メニューの外国語表示の調査を

行った。戸越銀座商店街は古くから昔ながらの商店街であり、その長さは日本有数であるという。また、近年外国人観光の訪問が多くなっているが、区役所や商店街の方の話によると、「東京ロケーション・サイト」の一つとなり、テレビ・ドラマ撮影の舞台に何度も使われたからだという。実際に街並みを見るといわゆる「昭和の下町」を思い出させるような雰囲気があり。同行した留学生からも、日本らしい街並みに見えるという感想があった。

現在中国などでは、日本のどんなドラマであってもインターネットで視聴することができる。著作権上の問題がある場合もあるだろうが、中国からの留学生などは、日本のテレビ・ドラマに精通している者が多く、観光の一環として個人またはグループが、この商店街を訪れることがあっても不思議ではない。



図-11 戸越銀座商店外での活動 コロッケ食べ歩き（左）と電気店での会話（右）

この商店街のある電気店の店主の方は、英語に堪能で、こうした観光客に対するガイド役も行っているそうだが、電気店内の商品についても詳細な説明が求められる機会が多くなっている。例えば、イオン発生機能付きヘアードライヤーが高価格の理由などを説明すると納得して買っていく客もいたという。

留学生の調査では、看板の見やすさ、外国語メニューのある店では外国語表記の正誤を、調査したが、国際化を目指している商店街の人々の意欲が前面にでていて外国語の誤表記も少なく、さまざまに工夫をこらした表示が随所に見られた。留学生も自然で積極的に自然な日本語を使う機会を得て、有意義な交流となった。

また、この商店街の売り物として「コロッケ」がある。商店街のプロジェクトとして始めたそうだが、現在は20店舗ほどの店でコロッケを販売している。もともと惣

菜を売る店が多かったので、一般のコロッケのほかにも、「餃子コロッケ」「おでんコロッケ」「フォアグラコロッケ」などの変わり種もある。留学生がこのような変わり種のコロッケを理解する際、一般的なコロッケ製法に加え、それぞれの変り種のコロッケに使われている惣菜についても知らなくてはならず、料理に関する知識を二重三重に把握する必要があった。

秋葉原や浅草などの有名観光地に何台もの大型バスで「爆買い」をする観光客ばかりでなく、インターネットなどで調べ、自分の嗜好に合った旅をし、日本を深く理解しようとしている外国人も増えている。

また、現在の都市生活では、スーパーやコンビニでほぼ無言のままで買い物が可能だが、今回の活動では日本語・英語、時には中国語を交えて、何とか意思疎通を図ろうとする留学生の姿が見られ、多言語による活動の楽しさ、複言語という考え方の重要性、言い換えれば、ことばはあくまで媒介であり、コミュニケーションが目的であることが再認識される時間であった。

3-3. 英語で話しかけてみよう（浅草）

2015年7月11日、東京都台東区雷門周辺に、留学生および英語ができる日本人学生が赴き、地域の方とともに、外国人観光客への道案内などを目的として英語で話しかける活動を行った。

台東区では、2020年オリンピック・パラリンピック大会に向け、外国人旅行者の方への接遇力を高めるため、住民の方に対するおもてなし講座を実施している。おもてなし講座では、おもてなしの心構えや基礎知識だけでなく、初歩的な英会話レッスンも行っているとのことである。

今回は、おもてなし英会話の実践編として、受講生が実際に街へ出て、初歩的な英会話で外国人旅行者に雷門周辺を案内することになった。

留学生と日本人学生は、受講生のサポーターとして、英会話を助けることになり、グループに分かれて行動した。また、活動の合間には、街の案内サインを調査し、外国人旅行者の視点から分かりやすい表示のあり方についても検討した。



図-12 浅草での活動
英語で話してみよう！

日本人の受講者の方は、英会話初心者の方が多く、身振り手振りなどを交えてなんとかコミュニケーションを取ろうとしていたが、留学生などのサポートが相当必要であった。さらに、「道案内」という行為そのものが難しく、地理的にも歴史的にも地域の事情に相当精通し、それを外国語で説明する技能を含めて、かなり高度なものであることが再認識された。また、突然話しかけられて身構える外国人観光客も多く、自分たちの活動を前もって知ってもらえ、アピールできるような工夫（外見や固定した場所での活動）が必要であることも再認識された。

道案内の標識については、地図・旅行ガイド・路上の標識等々、さまざまなものがあり、多様すぎる面があった。標識やピクトグラムで統一して表現するようにすれば、外国人観光客の移動が、より円滑にできると思われる。

この活動においては、むしろ、日本人の受講者の留学生に対するおもてなしの気持ちが強く感じられた。留学生がある程度日本語ができるせいもあるのだが、互いの紹介や、日本での生活について意見交換が盛んに行われ、また活動の終了時には、受講者の方から、留学生全員に手作りの折り紙がプレゼントされ、留学生はこのサプライズ・プレゼントに大いに感激していた。

3-4. 短期留学生（サマープログラム）からの意見聴取

2015年7月14日から8月3日まで、首都大学東京国際センターでは交流協定校の学生を対象に初級の日本語と日本事情に関する「サマープログラム2015」を開催した。その活動の一環として多言語対応、特に街中の表示・標識についての講義と調査等が行われた。講義に関しては、多言語対応協議会の方に2回お願いし、それをもとに学生のグループワークとして、調査とまとめを行っている。

サマープログラムの学生は初めて来日した者が多く、また、日本語の学習も始めたばかりであった。この意見聴取は主に英語で行われたが、留学生というよりも短期滞在の旅行者に近い視点で意見を述べることができたと思われる。以下に主な意見を列挙する。7月22日のフォーラムにおいても、代表者が一部の内容について発表を行った（以下の記述は主に多言語対応協議会のWEB報告に基づく²⁾）。

- ・ 駅の経路検索システムは、英語でプリントアウトもできて大変便利である。現在は一部の駅にしかないので拡大してほしい。
- ・ ガイドブックなどで美味しいレストランであると紹介されていても、現地へ行くと日本語の看板しかなく見つけられない。店名に英語（ローマ字）の表記をしてほしい。
- ・ 電車の路線図の全駅が掲載されているサインは、自分がどこにいるか、他の駅までどれくらい時間がかかるかとてもわかりやすい。
- ・ 空港などで、旅行ガイドICアプリや交通機関のICカードの存在をもっとアピールしてくれるとさらに便利である。
- ・ 日本に来て、多くの日本人が英語で声をかけてくれた。自分の国ではなかなかない経験だった。
- ・ 有名なランドスケープを街中の道案内表示や交通機関の看板表示に盛り込んでほしい。
- ・ 電車の色分けやナンバリングがわかりやすい。
- ・ 電車の路線による色分けが、駅構内の床面や壁面にもされていたらよりわかりやすい。
- ・ 電車内のデジタルサイネージは即時的に多言語で情報が表示されるため良い。
- ・ スタッフやボランティアが街なかでフラッグを持って道案内や観光案内をしてくれたら尋ねやすい。

4. おわりに

先に述べたように、本報告の前半は、研究者としての立場から、東京の言語景観を概観してビデオ教材を作成した経緯を述べ、教育利用法について触れている。しかし

² <http://www.2020games.metro.tokyo.jp/multilingual/index.html> (2015年12月22日アクセス)

ながら、後半の部分については、東京都に事務局を置く多言語対応協議会からの呼びかけに、東京都の各区市町などが対応し、首都大学東京の留学生と教員たちが参加・協力する形で行われ、行政的な目的に合わせた行為を行っている。

こうした活動として、2015年度には、このほかにも、杉並区高円寺、青梅市御嶽山、品川区で類似した都と連携したものが行われたが、それらについては別稿に譲る。また参加する留学生に関しては、早稲田大学や慶応義塾大学等の他大学にも声をかけて、本活動のすそ野の拡大を図っている。

今年度については、単発のイベントを試行してきたにすぎない。しかしながら、7月22日のフォーラムにおいては、舛添要一都知事も出席して留学生とのディスカッションが行われ、その席で、オリンピック・パラリンピックに向けて、多くの大学などに呼びかけてコンソーシアムを組織し、その後も留学生が学校教育などに協力する運動の継続可能性について議論された。

これまでの日本・東京の人々は、自分たちが暮らす環境において、日本語以外の言語使用の可能性や必要性に関して、強く意識することはなかったであろう。しかしながら、これからの国際社会や経済社会、研究教育には英語が必要であるという叫びは以前から存在した。多言語対応、言語景観において英語による表記の改善が中心あるいは出発点となるのは自然な流れであろうが、非英語圏の多くの国の人々がそれぞれの言語と文化背景とともにやってくるオリンピック・パラリンピックのような大きな国際交流の機会（東アジアの人はすでに数多く定住している）においては、多言語・多文化の短期的紹介と流入が確実に進む。その際、深く永続的認識が進む（進ませるべき）のは、英語だけではなく、日本語の理解と複言語でのコミュニケーションではないかと思料する。

特に、日本人（日本語母語者）の大部分は、日本語は空気のように存在するもので日本語が世界的に見てどのような特徴があり、学習する際どのような困難点があるか理解できていない。また、日本には、さまざまな背景を有する外国人定住者がいて、すでに数多くのコミュニティが存在するが、近隣にこうしたコミュニティがない限り、また、相互のコミュニティの橋渡しをする人がない限り、相互理解を進めることは難しい。

観光客・定住者を含め、有効で友好的なコミュニケーションの達成のためには、母語である日本語の音韻・文法・談話の特徴を十分に理解することが、前提として必要であり、その上で外国語の学習をした方が、深い理解と習得が得られること、また、定

住者は、必ずしも英語ができるわけではなく「やさしい日本語」の方が通じやすい場合があることなどが実感されていくと思われる。

この面においては、アクティビストとしてだけではなく、研究者としての探究も継続していく。

本稿で紹介した活動に参加した留学生（一部）。記して感謝する。

<登壇発表者 3-1 から 3-3 について>

David Wilhelm, Aldja Medjkane, Melanie le Bris, 徐陽, 周甜,
Manon Emerentienne

<サマープログラム 2015 参加者>

Timo Roeder, Alla Aleksandrор Chekulayeva, Katie Elizabeth Rooke, Clara Henssen, Hanisman, Meilany Elizabeth, Nikita Kurniarto, Abir Izzati Mohd Azman, Johnny Bong Lip Fun, Phusri Suphanida, Dexter Kenny Calkins, Clement Chi-Kent Yam, JongYoung Won, JaeHak Jyung, Nickolay Rumenov Sheitanov, Xia Li, Meng Lei Chen, Yu Qi Zhang

参考文献

井上史雄(2000)『日本語の値段』大修館書店

磯野英治・丁美貞・佐々木未華・Anisa Arianingsih・Eka Mahtra Khoirunnisa・Rekha Della Fitri (2013)「言語景観にみるインドネシアの日本語の現状と役割」『日本語研究』第33号, 首都大学東京・東京都立大学 日本語・日本語教育研究会, pp.113-

³ 弘前大学人文学部社会言語学研究室「減災のためのやさしい日本語」
(<http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/otoiawase.htm>)

2015年12月24日アクセス)

- 磯野英治・西郡仁朗 (2015) 「ビデオ教材「東京の言語景観-現在・未来-」の制作と公開」(デモンストレーション発表) 『日本語教育学会 2015年度春季大会 (於武蔵野大学) 予稿集』 pp.259-260
- 中井精一 ダニエル・ロング 編, 『世界の言語景観 日本の言語景観 景色のなかのことば』 桂書房
- 西郡仁朗・磯野英治 監修(2014) 『東京の言語景観 - 現在・未来 -』 (ビデオ教材 : http://nihongo.hum.tmu.ac.jp/mic-j/linguistic_landscapes/)
- バックハウス, ペート(2011) 「言語景観から読み解く日本の多言語化 -東京を事例に-」 内山純蔵監修, 中井精一 ダニエル・ロング 編, 『世界の言語景観 日本の言語景観 景色のなかのことば』 pp. 122-120, 桂書房
- ロング, ダニエル(2010) 「奄美言葉の言語景観」 中井精一ほか編集 『東アジア内海の環境と文化 (日本海総合研究プロジェクト報告5)』 pp. 174-200, 桂書房